



熟母略奪

息子の前で犯されて

筑摩十幸

挿絵 / asagiri

立ち読み版



Contents

目次

第一章	喫茶「オアシス」	4
第二章	浴室での儀式	26
第三章	野外露出	76
第四章	体育倉庫の淫母	123
第五章	VIP 監禁ルーム	162
第六章	相姦の地下室	223

登場人物

Characters

水野 遙

(みずのはるか)

三十三歳。喫茶店「オアシス」の女店主。五年前に夫と亡くすも、彼の遺志をつぎ、息子のシンジと店を切り盛りしている。

水野シンジ

(みずのしんじ)

遙の息子。気は弱いが成績は優秀で、母親思いの孝行息子。

俵藤 タケル

(ひょうどう たける)

シンジの同級生で、裕蔵の息子。父親に似てずんぐりとした小太りの体型。

俵藤 裕蔵

(ひょうどう ゆうぞう)

六十歳。不動産を経営しており、遙に店の土地の売買を持ちかける。

第二章 浴室での儀式

翌朝、タケルは何事もなかったかのように朝食を済ませ、シンジと一緒に登校していった。いつもと変わらない男子生徒らしい態度で。

（あれは夢だったのかしら……それとも……）

洗濯しながら昨夜のことを思い出す。

文字通り悪夢のような出来事で、できれば夢だったと思いたい。しかしシートやパジャマに残った生臭い残滓は、それが紛れもない事実だったことを告げていた。思い出しただけで匂いと味が口の中に蘇ってきて、遙はコクツと唾を飲み込んだ。

そのおぞましい『淫行』ビデオと引き替えに突きつけられた条件も奇妙だった。

——タケルのママとしてなんでも言うことを聞くこと。期間は一ヶ月。

それが一体どういうことを意味するのか、遙にはわからない。だが他に選択肢もなく、その条件を遙は受け入れるしかなかった。

（でも……所詮相手はシンジと同じ年の子よ。多分お小遣いが欲しいとか……そんなことに決まっているわ……）

昨日のタケルの行動を考えれば、それが希望的観測に過ぎないことはわかりきって

いる。だが人の心は弱いモノで、ついつい安直な抜け道に流されてしまうのだ。

「くよくよ考えても仕方ないわ。なるようになれよ」

不安を打ち消そうと、遙はパンツと頬をはたいた。

まずは喫茶店内の掃除から手をつけようとした時、不意に入口のドアが開かれた。

「ごめんなさい。お店は九時から……」

言いかけて遙はギョツとする。そこに立っているのはタケルだった。

「悪いけど、今日は店休日にしてもらうよ」

子供とは思えない好色そうな笑みを浮かべる。その姿こそ童顔の下に隠された邪悪なタケルの本性であった。

「ち、ちよつと……学校はどうしたの」

「そんなのサボりに決まってるでしょ。シンジもいないし、これで今日はおばさんと二人きりだね」

舐めるような視線が遙の身体を這う。まるで蛇に睨まれているような不気味さを感じて遙はゾクツと背中が震えた。

「ね、ねえ。もう一度考え直して。私に甘えたいなら、これからも泊まりに来ればいいし、こんなことしなくても、いい関係を続けられると思うの」

なんとか大人として主導権を握ろうとする遙だが、

「わかってないな、遙おばさん。それじゃ満足できないから、リスクを冒してここま
でやっているんじゃないか。それに僕たちはもう、普通の関係じゃないんだよ」

やれやれと呆れた様子で掌をヒラヒラさせるタケル。

「わ、私にどうしろって言うの」

「ここで脱いでよ。おばさんの裸が見たいな」

「えっ、ここで!?!」

まさか店の中でストリップさせられるとは思っていなかった遙は、驚きに目を見張
る。

「なんでも言うこと聞くんじゃよ」

「く……っ」

亡き夫と二人で築き上げた職場で、息子の同級生の前で裸になるなんて、死にたく
なるほどの屈辱と恥ずかしさだ。

（どうせ興味本位で見たがつているだけよ。私の……おばさんの身体なんか見ても、
昂奮するわけないわ）

「わかったわ」

覚悟を決め、遙はトレーナーの裾に指をかけた。

（気にしちゃダメ……どうってことないわ）

両手をクロスさせ、一気に捲り上げると、優美な肩のラインや深い胸の谷間が露わになった。大きめの乳房をベージュのブラがしっかりと包み込んでおり、乳肌はほとんど露出していないが、やはり恥ずかしいモノは恥ずかしい。

「下も早く脱いでよ」

「わ、わかってるわ」

まずはスニーカーと靴下を脱ぎ、続けてトレードマークのスリムジーンズをゆつくり太腿に沿ってずり下ろしていく。

下半身も同様に地味なベージュのパンティが股間とお尻を少年の目から隠していた。

「ふうむ。どうにも色気のない下着だなあ」

「ほ、ほっといてちょうだい」

指摘されるまでもなく、それは遙自身よくわかっていることだ。

しかし夫に先立たれ、息子を一人前に育て上げる『母親』に徹している遙にとって、色気などまったく必要のないモノだった。

「まあ、そのうち僕がもつとおばさんに似合う下着をプレゼントするよ。きっと超セクシーになれるよ」

「余計なお世話よ。セ、セクシーだなんて……からかっているの？」

「僕は本気だって言ってるでしょ」

タケルはニタニタ笑いながら遙の身体を觀賞する。その視線は子供ではなく、明らかに欲望を漲らせた男の目だった。

「うそよ……馬鹿馬鹿しいわ」

（だって私はシンジの母。三十すぎたおばさんなんだから。女なんてとつくに捨てて
るわ）

これまでずっと母親役に徹して生きてきた。

そんな自分が女として見られている——。

「……………」

なんとなくタケルと目を合わせづらくなって、遙は顔を伏せた。あんな露骨な好色視線を素肌に浴びせられることは久しぶりで、どう対応していいのかわからない。理性では無視すればいいとわかっていても、胸の鼓動は少しづつ速くなっていく。

「僕はおばさんの中に眠っている女の本性を引きずり出したんだよ。退屈な母親の仮面をむしり取ってね……」

遙がゾツとするような歪んだ笑みを浮かべるタケル。ひよつとしたらこの少年の中に悪魔が取り憑いているのではないかと思うほど。

「私はシンジの母親よ。女なんて……とつくに捨ててるわ」

「じゃあ、見られても平気だね。さ、ブラもとつてよ」

「うう……そ、そうよ。平気よ」

両手を背中に回し、ホックに指先をかける。

これを外せば乳房がすべて見られてしまう。

（あの人とシンジにしか見せたことないのに……）

愛する家族を裏切っているような背徳感にチクリと胸が痛むが、今は逆らうことができない。

覚悟を決めてホックを外すと、豊満な二つの果実がタプンタプンと波打ちながらまろび出た。

「はあっ……はあ……くうっ」

カーテンは閉めきつてあるが、差し込む日差しを浴びた肌が異様に火照る。こんな普段働いてる場所で裸になっているという実感が、遙をジリジリと追いつめていく。

「わあっ。すごい。想像通りデカイオッパイだね。少し垂れてるけど」

「あ、当たり前でしょ。もう三十すぎてるんだから」

勢いよく盛り上がった双乳は、やや垂れ気味にハの字に開いている。それは子供を産み、育てることで完熟した女体が持つ母性美とでも言うべき柔らかさであり、衰えとはまったく無縁なものだ。

その証拠に乳輪は鮮やかなピンク色で毛穴もほとんど目立たない。乳首も乳房全体

のポリウムと較べれば、可憐と言えるほど小さく愛らしい。青い静脈を微かに透かせるほど白い肌は、羞恥のせいではんわり赤くなっていた。

「こ、こんなたるんだ身体を見ても面白くないでしょ」

「僕はすつごく綺麗だと思うよ。で、サイズはどれくらいなの？」

タケルが子供っぽいい笑顔で嬉々として聞いてくる。そんな無邪気さに遙の怒りははぐらかされ、ついつい素直に答えてしまう。

「……九十の……Gカップよ……」

「Gカップかあ。これは予想以上かも。じゃあ下も早く脱いで」

「……っ」

遙は羞恥を押し殺すように唇を噛み、パンティの両サイドに指を引っかける。

（……お店の中で裸になるなんて……あなた、ごめんなさい……）

夫の思いでの詰まった店内で破廉恥な行為をしているという背徳感が、遙の心をかき乱し、動きを止めさせた。最後の一枚を脱ぐのはあまりにハードルが高い。

その時喫茶店のドアガラスの向こうを人影が過る。

「ひっ！」

一瞬硬直し息を潜めたが、ただの通行人だったらしく、すぐに影は消えた。

「ほらほら、グズグズしていると誰か来ちゃうかもよ」

「ううう……ハアハア……」

鍵は閉めてあるが、万が一誰かに見られたら身の破滅だ。少しでも早く終わらせようと遙は手に力を込める。

「はあ……はあ……」

徐々に引き下げていくにつれ、お尻の丸みに沿って伸び、一本の紐のようになる。そこから急速に収縮した。パンティはクルリと裏返り、振れ丸まった綱状に変化した。

「遙おばさん、結構毛深いんだね。ビキニラインも剃ってないから、はみ出しちゃうんだよ」

「~~~~~」

陰毛の生え方まで指摘されてカアツと頬が灼けた。タケルの言う通り人目に触れないヘアの手入れは怠っている。腋だけでも剃っていたのは幸運だった。

激しい羞恥で汗が噴き出し、激しい動悸で息ができないほど胸が苦しくなる。自分の身体ではなくなつたように、あらゆる動作がぎこちない。

それでもなんとか手足を動かして、パンティを抜き取った。

「はあっ……はあっ……こ、これで満足？」

「フフフ。ちゃんと背筋を伸ばして、気をつけだよ」

「……わ、わかつたわ」

自分よりずっと年下の男の子から言われるままに、遙は明るい店内で起立する。

(ああ……どうしてこんな恥ずかしいことしなくちゃならないの?)

普段と変わらない喫茶店の風景の中、生まれたままの素っ裸で立ち尽くしている。

コーヒートの香りが漂うシックで落ち着いた雰囲気の内店で、明らかに異質な存在であり、すべてを台無しにしている。夫との思い出を穢しているようで、申し訳ない気持ちで胸がいつぱいになった。

「やつぱり綺麗だよ、遙おばさん」

羞恥と背徳感にモジモジと身を揉んでいる同級生の母親を見つめ、タケルはペロリと上唇を舐めた。

全体に丸みを帯びたボディラインは、決して太っているわけではなく、遙の年代特有の柔らかな皮下脂肪によるものだ。

うなじから肩、さらに背中にまで一筆で描いたような曲線は芸術的で、それでいてウエストは砂時計のように深くくびれている。

腰まわりは優しく女らしい下腹部を形作り、お尻を包み込んでポリウムたつぷりに盛り上げ、さらに太腿にもムッチリと敷き詰められていた。

「うーん。出るところは出てムッチムチ、引っ込むところは引き締まって……最高級霜降り肉って感じの脂の乗り具合だね」

「い、いやらしいこと言わないで。どこでそんな言葉を覚えるの」
お尻を撫でながら卑猥なたとえを口にするタケル。親に似たのかもしれないが、とても○学生とは思えない。

「それじゃ、せっかく裸になっただんだし一緒にお風呂に入ろうよ」

「お風呂ですって？ こんな時間に？」

「今でもたまに一緒に入るってシンジが言ってたよ。僕のママなのに一緒に入らないのは不平等だよね」

いたずらっぽい笑みを浮かべるタケル。だがただ一緒に入るだけで済むとは思えず、少年の目的が猥褻な行為であることは間違いないだろう。

（落ち着くのよ……相手は少年なんだから……）

体格差を考えれば、タケルに無理矢理犯されることは考えにくい。お風呂に入りたいと言うのも、甘えたい気持ちの表れとも受け取れる。

なによりこれ以上この場所で破廉恥な行為をするのは避けたかった。

「わ……わかったわ。おやすい御用よ。それくらい……」

相手に隙を見せないよう、遙は敢えて余裕の態度をとる。

「わあい。やったね。じゃあ、ちよつと手を貸してね」

無邪気に悦んでいたタケルが遙の手を握る。

「握手？ あっ!？」

目にも留まらぬ速さでポケットから手錠を取り出し、ガチャンと遙の両手に嵌めてしまう。一瞬の出来事に、遙は呆然とするばかりだった。

「ち、ちよつと……タケル君!」

気がついて外そうとしてももう遅い。キツチリと手首を噛んだ拘束具はどうやっても外れそうにない。

「フフフ。お風呂が終わったら外してあげるよ。でも僕に逆らうとこのままだよ。服も着られないから、シンジが帰ってきたら驚くだろうな」

さらに首には赤い首輪が嵌められた。大型の犬用と思われる革具は頑丈そうで、突き出た金属の鉾が禍々しい雰囲気だ。その首輪の金具に手錠の鎖を引っかけられ、遙の両手は首から十センチくらいの範囲しか動かせなくなる。

(私……どうなってしまうの……?)

少年の用意周到さに遙は驚くばかりだった。

「遙おばさんとお風呂に入れるなんて、嬉しいなあ」

浴室に着くとすぐにタケルは服を脱ぎ始める。

「タケル君……きやあっ!」

目の前でタケルが無造作にパンツを脱ぎ捨てていくのを見て遙は狼狽^{うろた}える。なんと
言ってもタケルの逸物は大人並みなのだ。

「お風呂なんだから当たり前でしょ」

不安そうに身を縮ませている遙と対照的に、タケルは堂々と裸体を晒している。ま
だほとんど発毛していない股間に隆々とそそり立つ仮性包茎の勃起は、なんともアン
バランスで淫靡な印象だ。陰囊も重そうに垂れ下がって見るからに精力が強そうだ。

「今日は僕からサービスしてあげるよ。そこに横になって、脚を広げるんだ」

バスマットの上に仰向けになり、立て膝を広げる格好を強要される遙。まるで産婦
人科の分娩台のように、何もかも丸見えになってしまう。

「あああ……こんな格好させて……な、なにをする気なの？」

「お楽しみは後で。まずはじっくり観察させてもらうよ。ククク。三十すぎのおばさ
んのオマ○コって、熟れててエロいんだよね」

「ああ……そんな言い方って……恥ずかしいわ」

言葉と視線に射抜かれて遙は羞恥の吐息を漏らす。

漆黒の縮れ毛が覆う肉土手は高く盛り上がり、熟れた女の性を主張している。

形のよい陰唇が左右に緩やかなカーブを描いて並び、その内側から厚みのあるラビ
アが少しはみ出していた。

「ヒクヒクして、アワビの活け作りみたいだ。フッフ、シンジも自分の母親をここま
でじっくり見たことはないだろうね」

目を細めたり見開いたりして、舐めるように観察してくるタケル。昨夜の初な感じ
は完全に消えて、それどころかセックスに慣れているような堂々とした態度に遙は底
知れない恐ろしさを感じる。

「あ、当たり前でしょ。シンジはあなたみたいな変態じゃないわ。マジメない子な
のっ」

「ふうん。でもシンジも本心では見たいと思っっているよ。だってこんなにエロいんだ
もん」

卑猥な言葉で遙の羞恥を煽りながら花卉を左右にくつろげる。ピチッと音がして粘
膜が爆ぜ広がり、鮮やかなサーモンピンクが少年の目に映る。

「うう……そんなに見ないで……さ、触らないで……」

「中のほうは綺麗なピンク色だ。シンジを産んだなんて信じられないくらい新鮮なお
マ○コだね」

「はああ、うう……」

激烈な羞恥に、遙は唇を血が出んばかりに噛み締める。女のすべてをさらけ出され、
じっくり観察されるうち、熱っぽい何かが身体の奥で燻り出す。

「ここからシンジをヒリ出したのか。シンジのクセに羨ましいな。僕もこの穴から産まれてみたいよ」

異常な願望を乗せた指先を蜜口にあてがい、ニヤニヤと嗤うタケル。冗談のような口調だが、瞳孔のぎらつきは本気だ。

「ンああ……そんなことできるわけないでしょ。私はあなたのお母さんじゃ……あああつ……やめて……ゆ、指を入れないで……うううんっ」

挿入の瞬間、遙はギクンとおとがいを突き上げる。久々のせいだろう、指一本だというのに、ほじくられる蜜孔からビリビリと異様なまでの拡張感が湧き起こる。まるで初体験のような疼痛に顔をしかめた。

「これが……遙おばさんのオマ○コの中か」

タケルはコクツと唾を飲む。さすがの悪童も昂奮を抑えきれない様子で、瞳孔の中で指先が微かに震えていた。

「……温かくて……ヌルヌルして……柔らかい……」

「ううっ……あ、あ……んむっ」

ゆっくりと抜き差しされて、思わず出そうになる声を噛み殺した。

夫を失ってからずっと、守り続けた女の門。それをまさかこんな少年に開けられてしまうとは。

「はあっ……はあっ……うう……うう……うう……ンッ！」

一往復されるたび、ゾクゾクと痺れるような感覚が身体を中心を駆け抜ける。しかもそれは次第に強くなつていくのだ。一掻きされるたび、五年という年月が作った心の壁が、剥がれ落ちていくようだった。

（うそよ……私はもう女は捨てたはず……）

徐々に剥き出しにされていく女の性を必死に糊塗するかのように、遙は自分に言い聞かせ続ける。

「ああ……タケル君……も、もう……はあはあ、そんなこととしてはダメ……ああ、指を……指を抜きなさい……うううん」

「ひよっとして感じちゃった？」

抜くどころか、タケルは指を二本に増やして蜜壺を掻き混ぜてくる。カギ型に曲がついた指先が、ざらつく天井をコリコリと擦った。

「うあうう……か、感じてなんか……ないわ……あああう」

女体に埋もれていた繊細な神経を掘り起こされ、粘膜が熱を帯びていく。ジクジクと染み出る愛液が、タケルの指をいやらしく濡らし始めていた。

「くうっ……わ、私はシンジの母親よ……もう、枯れたおばさんなの！ だから変な気持ちになんて、なるはずがないのよ！ くくうんっ！」

「母親だから感じないってことはないよ。母親だって女さ。だからこんなに濡れちゃうんだ」

嗤いながら二本指を根元まで埋め込み、グリッと抉るように回転させる。

——ぐちゅんっ！

いやらしい水音が響いた瞬間、子宮口に突き刺さる快美の矢が、遙の理性を易々と撃ち抜いて脳幹を直撃した。

「ひいっ！ ふううああああ……んんんっ！」

雷に打たれたようにギクツと顎が裏返り、破廉恥な声が溢れ出しそうになる。手錠で拘束された両手を握り締め、ギユツと口元を押さえてギリギリ声を殺した。

(こ……これは……この感じは……)

ピリピリッと静電気のような感触がデリケートな身体の最奥を這い回る。くすぐつたいような、むず痒いような奇妙な心地よさ。

それはかつて夫とのセックスで感じた快美を思い出させ、遙を動揺させた。

「はああ……ううっ……ううう……んんんっ」

(ダメよ、遙……あの人と同じワケがないわ……うう……でも……)

頭を振って危うい思考を追い出すが、一度火が着いた身体は簡単には冷めない。息が詰まるほど苦しかったが、声を出すのだけは大人の女としてプライドが許さない。

そんな遙の苦悶をはぐらかすように、タケルは唐突に指を抜け出させた。

「ンああ……はあはあ……ああ……はあはあ……」

なんとか堪えきり遙はふいごのように喘ぐ。あと数十秒責められていたら、とても声を我慢できなかつただろう。

「今度はコレで感度を調べてあげるよ」

グツタリする遙を尻目に、鞆から取り出したのはグロテスクな男根を模した淫具だった。最も太いところで三センチほど、長さは二十センチといったところか。

「いくよ」

いやらしいピンク色の先端を膣口に押し当てると、そのままグツと押し込んできた。すでに指での愛撫に濡れてしまった蜜孔は、いとも簡単に広がり淫具をヌルりと呑み込んでしまう。

「ああああ……な、なにをつ……変なことしないで……っ！」

体内に生じた指とは異なる挿入感に、遙は眉をたわめる。

「ただのバイブだよ。使ったことないの？」

「バイブなんて……そ、そんないやらしいモノ、私は使いませんっ」

「食わず嫌いはよくないよ。それともいいお母さんぶってる？」

冷笑しながらバイブレーターのスイッチを入れた。

「うっ、うあ……あああ……っつ」

ウイイインとくぐもった振動音が膣内で暴れ出す。小さな機械なのに、そこから発する淫らな波紋は、粘膜を揺さぶり蜜嚢を貫通して子宮まで伝播した。

(な……なに……これ……すごい……っ)

機械による愛撫が初めての遙は、生まれて初めて味わう刺激にどう対応しているかわからず、押し寄せる熱波に翻弄されていく。

「すごい反応だね。そんなにコレが気持ちいいの？」

タケルはほくそ笑みながらさらに振動を強くした。

ウイイインッ！　ウイイインッ！　ウイイインッ！　ウイイインッ！

「あああ……うぐうう……っ……や、やめて……もう、止めてえ……あああ」
湯上がりのように紅潮させた美貌を引きつらせ、遙は熟れた牝腰を振らせる。汗を滲ませた太腿が筋を浮かせて突っ張り、遙が性的に昂奮しているのは誰の目にも明らかだった。

「このまま一回イかせてあげるよ」

調教の主導権を握るためにも絶頂体験は有効だ。特に遙のようにプライドが強い女性にとって、快楽を貪ってしまったと言う敗北感は、自縄自縛の鎖となる。

「ンああ……はあっ……いや……イクなんて……それはだけはいやよ……う、ううン

っ、はあはあ……うううむっ」

年端もいかなない少年にいやらしい玩具で弄ばれて絶頂するなど、絶対に許されない屈辱だった。

なんとか破局を逃れようと、遙は無意識のうちに膣肉をうねらせて、淫具を押し出そうとしていた。媚粘膜が内側から捲れ返り、口を開いた膣孔から愛液とともにバイブが抜け出てくる。

「すごい、産卵するみたいだ。でもそうはいかないよ」

待ち受けていたタケルはすぐさまバイブのグリップをつかみ、逆に子宮口に届くまでズブリと押し込んでしまう。

「うあああ……くっ……はあっ……んっ、んんっ……あ、あああう……んっ」

とびきりのカウンターが炸裂し、目の前が赤く染まる。子宮の底にダイレクトに響く快美が、くすぐりたいようなむず痒さとともに全身に広がってくる。振動を浴びせられる膀胱の中で、オシッコが波立っているような錯覚に襲われ、失禁しそうな恐怖に遙は括約筋を締めつけた。

「ふうっ、あ、これ……あ、ああ……だ、だめ……んあ、あ……う、くふううんっ」

それがより強く、より深くバイブの淫震を感じることになり、ふしだらな喜悦に遙は思わず腰を突き上げてしまう。頭の中で無数の星が生まれては、粉々に砕けて消え

ていく。

「そろそろだね。シンジが見たこともない女の顔を見せてもらおうよ」

張り型を前後させ、リズムカルに抜き差しさせる。振動とピストンの複合攻撃が女の急所である柔らかな粒天井をゴリゴリと研磨した。

「ひい、あああつ……つく、はああつ……あうつ……う、う、くうう……つ」

(堪えるのよ、相手はまだ……息子の同級生なのよつ)

恥丘の裏を灼く虐待の火花に打ち上げられ、少年の眼前に掲げた腰をカクカクと上下させる。それがどんなに恥ずかしい格好か、わかっていても止められない。子宮を見えない糸に縛られ、空に向かって釣り上げられているようだった。その上昇に伴って遙の官能曲線も急上昇していく。

「あつ、あ、あああ、はあああうううつ！　だ、だめ……つ！　もうだめえつ！」

手錠に拘束された手がブルブル震えながら胸をかき抱く。両腕に挟まれた豊満なGカップがギュウツと搾り出され、麓から頂点の乳首に向かって痙攣が走り抜けた。

「うあつ、ああつ……あああああ——つ！」

濡れた唇から堪えきれない嬌声が溢れ出し、白いエナメルの歯並びを輝かせながら遙の美貌がガクンツと反る。黒髪も悩ましい頭頂をバスマットに擦りつけながら、たおやかな裸体をブリッジさせて揉み搾る。野太い淫具をくわえ込んだ蜜洞が収斂し、

熱い牝蜜をドツと吐き出した。

「ンあつ、あああつ……ひいつ……はああ……ああ……はうんん……つ」

限界まで収縮していた筋肉が、一転急速に弛緩してゆく。天頂まで登り詰めていた意識も、螺旋を描きながら深い奈落へと落ち込んでいく。

「はあつ……はあつ……はああ……ああ……」

遙はバスマットの上に汗まみれの身体をガクツと投げ出した。意識まで漂白され、恥ずかしいところが丸見えになっていることを気にする余裕もない。それほどまでに、数年ぶりのオルガスムスは強烈だったのだ。

「フフフ。派手にイッたね、遙おばさん」

「うう……み、みないで……」

遙は蚊の鳴くような声で訴えるばかり。タケルの予想通り、屈辱まみれのエクスタシーに大人の女としての矜持を打ち碎かれ、遙は茫然自失状態だった。

一度アクメを極めたせいだろうか、汗ばむ肌から、淫具をくわえ込んだ秘部から、黒髪を張りつかせたいなじから、熱帯雨林のような蒸れたフェロモンが匂い立ち、ぐんと色気を増している。

「じゃあ、儀式を始めようか」

「ハアハア……ぎ……儀式……？」

「フフフ。ここを全部剃るんだよ」

靴から安全カミソリを取り出してニヤリと嗤う。

「え……剃るって……そ、そんなっ！ 待って、待ちなさい」

遙が脚を閉じようとするとするより先に、白い泡状のローションがピュッと吹きつけられた。

「きゃっ」

冷たさにびくんっと身を強張らせる。その冷たさは少年の冷徹な意志を表しているように遙には感じられた。

「ツルツルに剃られたアソコを息子には見せられないでしょ」

薄笑いを浮かべながらT字カミソリを構えるタケル。銀色の冷光が薄暗い浴室で一際強く瞬く。

「もうシンジとはお風呂にも入れなくなる。つまりこれは遙おばさんを僕だけのママにするために必要な儀式なんだよ」

「そんなことされたって私はシンジの母親よ。あなたの思い通りになんて……あっ」

「暴れたらケガするよ」

少年の異常なまでの執着心に遙は恐怖すら覚え、頬を引きつらせる。しかし絶頂直後の重い身体は思うように動いてくれない。さらにカミソリの刃を大切なところに押

し当てられては、足掻くこともできなかつた。

「ちよつと時間がかかるけど退屈はさせないからね」

「う、うあああつ！ いやあつ！ と、とめてえ！」

再びバイブが振動を始め、遙は動転の悲鳴を噴きこぼす。

「振動は最弱にしておいたから、ゆつくり楽しんでよ」

カミソリを構え、タケルは遙の脚の間にどつかかと胡座をかく。遙に立ち直る時間を与えない。

「ジョリ……ジョリ……ジョリ……」

「あ、ああ……やめて……ああん」

鋭いカミソリに動きを封じられ、遙は子宮を揺さぶる悦震にジツと堪えるしかない。その間にもカミソリは順調に動き、ローションの泡が削り取られたあとには、透き通るほど白い素肌が露わになっていく……。

そして十分後。

「うう……はあ……はあ……ああ……」

遙は真横に美貌を背けたまま、臉を伏せてジツとしている。

エクスタシーの余韻が引く間も与えられずバイブで責められて、頭の中は濃い霧に

包まれ、まだ理性が回復していないのだ。

「遙おばさん、儀式は終わったよ」

パイプのリモコンスイッチを一段強くし、遙が夢の世界に逃げ込むことは許さない。

「う、うう、うああ……あああ……っ」

キュツと眉がたわめられ、頭が跳ね上がる。

「ああ……うう……タ、タケル君……」

「見てご覧よ」

黒髪をつかんで引き起こし、正面の鏡を見せつける。

「あっ……ああああっ！」

そこに映る自分の姿を見て遙は恥辱に打ちのめされた。

ムチムチした太腿に挟まれたデルタ地帯に、本来あるべきヘアは一本もなく、縦にクッキリとワレメが走っているだけなのだ。

まるで童女のようにされてしまったクレヴァスだが、成熟した大人の官能美は隠せない。左右のポツテリ厚みのある陰唇、内側からはみ出したピンクの花びら、その合わせ目に頭をもたげたクリトリス。なにより淫具をくわえ込まされて愛液を湧かせ続ける蜜孔。

女のすべてが剥き出しにされ、幼げな外見とのアンバランスさが卑猥極まりなかつ

た。

「こんな恥ずかしい姿、シンジには見せられないよね。これで遙おばさんは僕のモノだ」

「そ……そんな……」

本当にタケルの所有物にされてしまったような気がして、遙はしばし呆然と鏡を見つめていた。両脚も閉じることを忘れたように、M字に開脚したままだ。

「今度は僕がサービスしてもらおうかな」

「ああ」

遙は身体を抱き起こされて、タケルの前に正座させられた。

「綺麗にしてよ」

仮性包茎の勃起が目の前に突きつけられる。肉棒の位置は唇とちようど同じ高さで、タケルがなにをさせたいかはすぐに理解できた。

「うう……」

甘酸っぱい少年の体臭がツンと鼻を突く。昨夜はパニック状態でよくわからなかったが、やはり息子と同年とは思えないほどの逞しさだ。

「やらないとどうなるか、わかってるよね。それともお仕置きされたくてわざと焦らしているのかな」

意地悪く啗うタケルがリモコンを一段階強めに操作した。ブウウンツと振動が高まり、秘奥が激しく攪拌される。

「うううあ……や、やるわ……やるから……ああ……これを止めてっ」

「止めて欲しかったら、やることはわかってるでしょ」

「ああ……」

剃毛の間もずっと微振動を送り込まれていた腔肉は、すでに悩ましい疼きを訴えていた。

ジリジリと燻り続ける淫熱が、今にもまっ赤な炎を噴いて燃え上がってしまった。これ以上責められれば、またタケルの前で恥を晒すことになってしまうだろう。

（そ、それだけはいや……早く終わらせないと……）

淫らな振動に堪えながら、オズオズと勃起ペニスに手を伸ばす。

包皮を剥き返らせ亀頭を露出させた瞬間、あの味と匂いが口の中に蘇り、思わずコクリと唾を飲み込んだ。

（ああ……やっぱりすごいわ……この子）

亀頭は毒キノコのように傘を開き、凶暴な異生物のようにヌルヌルと光っている。太い血管がミミズのようにのたうつ胴部は握り込むのが難しいほどの極太だ。

そしてたっぷりとぶら下がる陰囊も、胡桃でも入っているのではないかと思うほど

大きく、尋常ではない精気を漲らせていた。

身体に不釣り合いなほどに発育した男性器は、間違ひなく大人の性能を秘めている。そう思うと、これまで少年と思ってきた相手を男として意識せざるを得ず、それが遙の中の女の部分を刺激してくるのだった。

(ごめんなさい……あなた……)

胸が痛くなりそうな背徳感に震えながら遙は唇を開き、舌をペニスに向けて突き出す。

「んっ……むうん……あああ……んちゅっ」

舌が触れた瞬間いつそう濃い精臭が口中に広がり、頭がクラクラしてしまふ。

昨夜は混乱していてよくわからなかったが、今舌先に感じる迫力は亡き夫のモノすら凌駕しているだろう。それはサイズのせいもあつたが、なにより遙に対する欲望、情念の強さの違ひだった。勃起した海綿体の硬さ、亀頭の張り出し方、先走るカウパの量……何もかもが牡としての優位さを物語っている。

「もつと舌を動かして、手も使つてよ」

「う、うう……」

陰茎を軽く握り、指で作つた輪を前後にスライドさせる。硬い感触は鉄筋入りのコンクリートのようで、太さも指が届かないほど。そしてヤケドしそうなほど熱い。

(……なんて遅しいの……)

まざまざと牡のパワーを見せつけられて、圧倒された遙は少しずつ口淫奉仕にのめり込んでいく。長く伸ばした舌で勃起を根元から先端まで舐め上げ、手指もリズムカ
ルに剛棒をしごき出す。

「フフフ。調子が出てきたね。やっぱり遙おばさん、欲求不満だったんでしょ」

「ンああ……くちゅっ……ち、ちがうわ……んふっ……馬鹿なこと言わないで……むちゅんっ」

言葉では否定しても、身体は正直だった。

濃厚な舌奉仕に加えて、命令もされていないのに、陰囊までも優しく掌で包み込み、ヤワヤワとマッサージを送り込んでいる。

(ああ……こんなこと……夫にもしたことないのに……)

遅しい牡に奉仕しているという実感が、遙の中の女をジワリと溶かして、妖しい気分をますます誘ってくる。

そこに淫具の振動が加わって、秘奥は煮えたぎるように熱く濡れ、何かを欲しがるようにヒクンヒクンと蠢動した。

(だ、だめ。しつかりするのよ遙……私は大人……なのよ……息子の同級生相手に……変な気持ちになるなんて……絶対に許されないわ)

従属と矜持。欲望と理性。

相反する感情が遙の中でせめぎ合い、だんだんワケがわからなくなってきた。伏し目がちの瞳が妖しい粘り気を帯びて煌めき、口元も緩んで涎が顎を伝い落ちていく。

「ほら、そろそろチンポくわえてよ、おばさん」

バイブレーターがヴィイインッと唸りを上げ、蜜孔をこね回してくる。

「うっ、あ、ああ……うううんっ！」

淫らな振動は膣肉だけでなく、子宮や卵巣、恥骨やクリトリスにまでも伝わって、遙を牝へ変えようとする。

もともと感受性が豊かで熟れた身体だ。強烈な快楽刺激に逆らえず、今の遙は少年の意のままに操られるリモコン人形のようなだった。

「んああっ……わかったわ……んむふっ……やるから……むふうんっ」

混乱したまま、命令通り従順に亀頭部を深々と頬張る。遙にとってそれは自分を墮落させる毒蛇のように感じられた。

（ああ……すごく大きくて……太くて……あの人より硬くて……熱い……本当にシンジと同年なの……？）

口の中に感じるペニスの存在感は圧倒的だった。そして仮性包茎という幼げな外見とは裏腹に、確実に女を孕ませる能力があるであろうという直感が遙を動揺させ、同

時に悩乱させた。

「もっと強く吸って、もっと舌を動かして……そうそう……上手だよ」

憧れていた友人の母に口淫奉仕させる昂奮でタケルが声を上擦らせる。女の熟れはこういうところにも表れるのか。吸いついてくる頬の粘膜はポツテリと柔らかく、湧き出す唾液もローションのように男根に馴染んでくる。

「んふっ……くちゅ……ああ……んん」

淫熱にとろけた柔褻がジュンツと濡れて、はしたない熱蜜を湧かせてしまう。恥ずかしさに思わず締めつける膣肉が、淫具の振動をさらに強く感じてしまう。当然タケルがそれを見逃すはずがない。

「また濡れてきたよ。遙おばさん、僕のチンポに発情したんじゃない？」

「んはあっ……そ、そんなこと……んむっ……ぴちゃ……ないわ……はむうん」

「まだ素直になれないの。鏡を見てご覧よ」

タケルに促されて、勃起をくわえたまま流し目を鏡に向ける。

「……………ッ！」

そこに映った自分の姿を見て遙は言葉を失った。

紅潮した頬に乱れた黒髪を張りつかせ、妖艶な仕草で食べるような口唇奉仕をする女。無様に鼻の下を伸ばし、タコのように唇を突き出したフェラ顔は、まるでAV女優

のようで品性の欠片もない。

それだけでなく、ツルツルに剃り上げられたヴァギナをだらしなく開帳し、膨らんだ肉豆も、愛液をトロリと垂れ流す牝穴も、すべてを少年の目に見せつけているのだ。
(こ、これが私なの……!!)

鏡の中、とろけた表情で少年ペニスを吸いしやぶる女と目が合う。妖艶な流し目は、我ながらゾクツとするようないやらしさ。

「フフフ。それが遙おばさんの本当の姿……淫乱な牝の本性だよ。おじさんが死んでからずっと男に飢えていたんだね」

遙の戸惑いを見抜いたようにタケルが囁く。その一言一言が鼓膜を舐めて麻薬のように浸透し脳髓を甘く狂わせる。

「ンああ……ち、ちがう……んちゅっ……くちゅんっ……ちがうの……私はそんな……ああ……いやらしい女じゃないわ……はああん」

否定する唇はしかし、美味しそうに初々しい牡角を舐め回している。本格的なフェラチオ奉仕は初めてだというのに、舌は巧みに肉棒の急所をくすぐり、添えた手も陰囊を優しくモミモミと撫でさすっていた。自らの淫行を映し出す鏡からも、目を離せない。

(……私、おかしくなっちゃったの……?)

数年ぶりの悦楽を知ってしまったせいだろうか。カッカと燃え盛る女体をコントロールできないまま、ズルズルとタケルのペースに引き込まれていく。

(ああ……また……きちゃう……)

徐々に迫り来る昂奮が可燃性ガスのように子宮いっぱいに充填されていく。刻一刻と迫る爆発の瞬間。その前にすべてを終わらせなければならぬ。

「ううっ……はあはあっ……んちゅっ……ちゅばちゅばっ……ねえ……タ、タケル君……ンああ……も、もう……早く射精して……早くう……あああん……あっ……はむうんっ！」

破局を回避しようと、遙はいつそう情熱的にペニスを吸い舐め、指の輪で陰茎をしごき上げた。唾液のぬめりが潤滑になり、手コキのピッチはどんどん加速していく。

「ああ……気持ちいいよ……はあ、はあ……シンジのおばさんが……僕のチンポをしごいて、おしゃぶりしてくれるなんて……ああ……たまらないよ」

技巧そのものは特別上手いわけではないが、唇も指もしっとり柔らかく弾力があり、触れられているだけで射精してしまいそうなほど気持ちいい。さらに同級生の母親にフェラチオさせているという状況がタケルに異様な優越感を与え、快感を何倍にも増幅させるのだ。

(ああ……熱い……身体が熱いわ……)

口から流れ込む背徳の淫氣と膣内を攪拌するバイブの淫悦とが混ざり合い、二重螺旋の鎖となつて遙の子宮をキュウツと締めつける。遙の身体はもう本人の意思ではどうにもできないまで、発情しきつていた。

(もう……いつそのこと……)

媚肉を責める淫具に、物足りなさすら覚え始めていることに気づいて、遙は戦慄を覚えた。

「またイキたいんじゃないの？ もつと強くしてあげようか？」

目の前にぶら下げられたリモコンスイッチを思わず目で追つてしまふ遙。それからハッとしように我に返り、ブンブンと首を横に振つた。

「ちがうのか。それじゃあこれはいらぬね」

タケルは意地悪く嗤うと、いきなりリモコンに繋がったケーブルを引つ張つた。

「そ、そんなに引つ張つたら……うああああんっ！」

遙が驚く間もなく、バイブは緋色の膣口からヌルリと産み落とされ、バスマットの上に転がる。続けて口に頬張つていた逞しい肉棒も抜き取られてしまった。

「うあんっ……はああ……はああ……そんな……ああ……ううっ」

急に快楽の源を二つの穴から奪われて、熟れた女体に満ちるのは、狂おしいほどの寂寥感。渴きにも似た飢餓感が粘膜に張りつき、餌を求めるイソギンチャクのように

桃色の襷をピクピク蠢かせてしまう。

「はあ、はあっ……こ、こんなのって……うう……ヒ、ヒドイわ」

刺激はなくなっても一度火が着いた身体は簡単には冷めてくれない。下腹に溜め込んだ淫熱が溶岩のように、ジリジリと子宮を内側から焙あぶっている。

「なにがヒドイのかなあ？　そうか、こんなおもちやじゃ満足できないってことか」
決めつけるように言うと、タケルは自慢げに勃起を揺すって見せた。

「ああ……」

ゼエゼエと犬のように喘ぎながら、遙は長大な剛棒を仰ぎ見る。

遙の奉仕でペニスさらさら雄々しく猛々しく反り返っていた。たつぷりとまぶされた唾液に磨き抜かれ、ニスを塗られたようにテラテラと輝いている様は、まさに肉の太刀といった大迫力だ。

「欲しいんでしょ、僕のチンポが」

薄く噛いながらタケルは両脚の間に腰を割り込ませた。

「あ……ああ……だめ……」

若い獣性を漲らせた淫棒が太腿の内側に擦りつけられる。

これから犯すのだという明確な意志を見せられても、遙は否定の言葉も出せなかった。どういうわけか足腰も痺れてしまったように力が入らず、とじ合わせることも蹴

飛ばすこともできない。

「口ではダメって言うけど、下のお口はもう涎ダラダラで、すっごく欲しがってるよ」
うそぶきながら、亀頭先端がラビアをクチュンツとなぞり分ける。内側に溜まっていた愛液が溢れ出て、お尻のほうにまで滴っていく。

「はあ、はあ……そ、そんなこと……ないわ……私は……シンジの母親なのよ」

「だったら拒否してご覧よ。脚で僕を蹴飛ばしてみたら？」

「うう……」

挑発されても遙は身動きできなかつた。数年ぶりに感じる女の疼きは遙自身が思っていた以上に強烈で、どうすれば抑え込めるのかまったくわからない。

「できないよね。フッフ、つまりこれはレイプじゃなくておばさんが望んでるってことだよ」

ジワリジワリと剛直が無毛のワレメの中に食い込んでいく。爛れるほど火照った粘膜の花弁が、貞操を忘れてふしだらに開花させられていく。

「う……あ……わ……わ……わたしが……望んだ……？」

「おばさんは女を捨てた、シンジのお母さんだなんて言ってるけど、本当は性欲旺盛でスケベでセックスが大好きな女なんだよ。おじさんが死んでからずっと寂しかったんでしょ。だから僕にこんなことされても逆らえないんだよ」

タケルの言葉が呪文のように脳内でこだまする。

(私は……スケベで……セックスが大好きな女……)

まるで催眠術にかかってしまったように、墮落を誘う言葉が、朦朧とする頭の中で何度もリフレインする。

実は剃毛の時に塗られたローションには催淫媚薬が含まれており、それが心身の自由を奪っていたのだが、遙が知るよしもない。

「今から僕が遙おばさんの望みを叶えてあげる。おばさんをもう一度女に生まれ変わらせてあげるよっ」

タケルが勢いよく腰を突き出し、若々しいチェリーピンクの勃起ペニスがズブリと膣孔に突き刺さった。

「あ、ああ……い、いた……うああ~~~~っ!」

それは甘美な楔くさびとなつて幾重にも折り重なった粘膜の桃色カーテンを一枚一枚掻き分けて進み、最も深い人妻の魂にまで届く。久しぶりのせいだろう、入念な前戯にもかかわらず蜜奥に鈍い痛みが走った。

「痛がつてくれるなんて嬉しいなあ。まるでおばさんの処女を奪つてみたいだよ。フフフ。ほおら、僕のチンポがおばさんの中に……はあはあ……入っていくよっ」

メリメリと音がするようにして極太が沈み込み、溜まっていた愛液がドクツと溢れ

出す。パイプなど較べものにならない、身体が真つ二つに裂けていくような衝撃だ。

「あああつ……だめ……くつ……ふぁう……だめよ……タケルく……んあ……いたい……あああああゝゝつっ！」

そして子宮の底にズシツと熱い質量をぶつけられた瞬間、遙はギクンとおとがいを反り返らせた。粘膜を開かれる疼痛が本当にタケルに処女を奪われたような屈辱を与え、無数の星が瞬く脳裏に、愛する夫と息子の面影が浮かぶ。

(ああ……あなた……シンジ……ゆるして……)

ついに禁忌の侵入を許してしまい、罪悪感に打ちのめされる遙。まさかこんな形で守り続けた操を奪われてしまうとは。しかも相手は息子の友人なのだから、さらに背徳感が増してしまう。

「はああつ。すごいや……遙おばさんのオマ○コッ！ トロトロにとろけて……キュウキュウ絡みついて……はああつ……チンポが食いちぎられそうだよ」

「うう……そんな言い方……はあう……しないで……あああむ」

悔しさと悲しさがこみ上げ、色っぽい二重瞼の端に涙の粒が光る。シンジがいなければ舌を噛み切ってしまったと思うほどの屈辱で、拘束された両手をキュツと縮み込ませる。

しかしその一方で逞しい巨根に埋め尽くされた蜜壺からは、痛みが急速に薄まり、

代わって息も詰まるような快楽が波紋のように全身に広がっていた。沸々と熱い何か
が子宮の奥底で沸き立ち、数年来忘れていた女の悦びが目覚めようとしている。

「遙おばさんも嬉しいでしょ」

「はあはあ……う、嬉しいわけではないでしょ……ああむ……は、はやく抜きなさい……
こ、これは……いけないことなの……あなたには……まだ早すぎる……ああうっ」

「まだイイお母さんぶってるの？　こんなにオマ○コ濡らしてるくせにさ」

嘲笑うように腰をグラインドさせ、肉棒で蜜孔を掻き混ぜる。グチュッグチュッと
はしたない水音が溢れてきて、遙に言い訳を許さない。

「ンあっ……あああ……ちがうの……ああん……これは……」

「なにが違うって言うのさ」

「あああ……ちがうのお……ンあっ、ひああっ、ああああ〜んっ！」

タケルが腰を振り始めると、もう声を抑えることもできなくなった。

力強いピストンが撃ち込まれるたび、絶望の底から爛れるような快感が湧き起こる。
突き上げられる子宮が熱く灼け、捲り返される贅肉がとろけて新たな蜜を湧かせてし
まう。

（この子……どうしてこんなにすごいのか!）

身体は少年でも肉棒の質量もパワーもテクニクも、並みの大人を凌駕していた。

ひよつとしたら性体験は遙より豊富かもしれない。

母親と息子の友達という立場ながらも、いざ牡と牝の関係になってしまえばそんなものはまったく意味がなかった。逞しい男根を突き立てるタケルには早くも支配する者の風格が備わり、犯される遙から奪われる奴隷の哀愁が漂ってくるのだ。

久しぶりの男根挿入に張り裂けんばかりだった膣孔も次第にタケルのモノに馴染まされていく。

「ほうら、こんなに悦んでいるじゃないか。おばさんのオマ○コ」

タケルが抜き差しに加えて、のの字を描くように腰を捻る。少年とは思えない巧みな動きに理性を溶かされ、遙は女の本能を剥き出しにされていく。

「はああ……ああん……いや……やめ……てえ……あ、ああ、あん」

「これがおばさんの本性なんだ。僕みたいな子にレイプされて感じちゃう、欲求不満の変態ママなんだよ」

「ああ、言わないで……もう……ゆ、ゆるして……っ」

いやらしい言葉を耳元で囁かれて、逞しい剛棒に秘奥をこねまわされて、全身が被虐の炎にくるまれていく。心も身体も溶けて一個の淫らな肉の塊にされていくようだ。

「あ、ああ……いや……あああ……ん」

ズンズンと突き上げられて、遙は煮えたぎるような肉悦の奔流に呑み込まれた。豊

満な乳房が波打つように上下し、くびれた腰が妖しくうねり出す。柔褻が背徳感に震えながら収縮し、肉棒を食い締めてしまう。

「くう……おばさんの熟れマ○コが、グイグイ締めつけてくるよ。ハアハア……僕のチンポでイかせてあげるからね」

泥濘状態に濡れそぼった媚肉を、タケルがこれでもかど抉り抜く。友人の母親を自分色に染めようと、小柄な身体からは想像もつかないほど激しく熱い杭打ちが、女陰の奥を掘削した。犬歯を剥き出しに荒々しく腰を振る様は、さながら小さな猛獣と言ったところだ。

ズブッ……ジユブッ……ズブブッ……グチュンッ！

「あつ、あああんっ！ タ、タケルく……ん……これ以上はあ……あああんっ」

硬い亀頭に子宮を突かれ、鋭角の力りに恥骨の裏を擦り上げられ、狂おしい官能が押し寄せる。それは夫に抱かれた時と同じ、いやそれ以上の法悦だった。

（ああ……こんな……子にされて……だめ……だめえ）

黒髪を振り乱し、おぞましい快楽から逃れようとする遙。

しかし生のペニスを送り込んでくる快楽はバイブなんか比較にならない激しさで、とても耐えることはできない。

「ほら、イっちゃえ。シンジに見せたことないエロ顔を見せてよ」

「ひっ！ あ、あ、あ、ああ~~~~っ」

唐突に生々しい悲鳴を上げて遙は背筋を反らせた。

蜜肉から放たれた快樂の矢が、心臓を通過して脳天に突き刺さる。

験の裏で火花が弾け、頭の中がまっ白になった。

「つく……むう、うううっ！ あ、あう、うううんっ」

呻くような声を絞り出しながら、汗まみれの裸身をビクビクと痙攣させる遙。

手錠の両手が、血が出んばかりに強く拳を握り締め、たわわな乳果を突き出すようにして胸が反り返った。

「イったね。遙おばさん」

「はあ……はあ……はあ……わ、わたし……また……」

タケルに言われて絶頂したことに気づく。二度目の敗北は、一度目を数段上回る激しさだった。回を重ねるごとに快感が大きくなっていくような気がして、遙は自身自身が恐ろしくなりブルブルと胴震いする。

「フフフ。僕のチンポの味をよく覚えてね。一生忘れられなくしてあげるよ」

きつい収斂に包まれながらも、タケルは抽送のリズムを乱さない。自分の形と大きさを遙の子宮に刻み込むように、じつくりと責め続ける。少年とは思えない持久力だ。

「ひっ……あ、あうう……いやあ……もうやめて……お、覚えさせないで……あつ、

ああっ……おかしくなっちゃう……っ

「おかしくなっいいいよ。僕はいやらしい変態ビッチのママが欲しいんだから」
タケルは脱力した遙の脚を肩に担ぎ上げ、折り畳むように体重をかけた。

「ビッチなんて……うあ、あああ……っ！」

お尻が天井を向くほど屈曲させられ、結合がさらに深まる。子宮口に亀頭が食い込んできて、そのまままで貫かれてしまいそう。

「何度でもイかせてあげるよ。僕の奴隷ママになるって誓うまでね」

タケルの体重を乗せたピストンが垂直に蜜孔に撃ち込まれてくる。

「うああん！ い、いやよっ、あなたのママになんて……あ、あああっ」

いったばかりで敏感になっている粘膜を研磨され、金属質の悲鳴が噴き上がる。だがそれも初めのうちだけだった。

「ンあ……いやなのに……うう……だ、だめ……あ、うあああんっ！」

嫌悪の悲鳴はすぐに啜り泣くような喘ぎへと変わり、持ち上げられた太腿に痙攣が走っては、つま先も丸まったり反り返ったりを繰り返す。

「ハアッ、ハアッ……ほうら、僕のチンポ気持ちいいでしょ。僕の奴隷ママになったら、これから何度でも味わえるよ」

「うあああ……気持ちよくなんか……あああ……だめ……はあ、あああ……ん」

首を弱々しく振るけれど、ハッキリ否定することもできなくなっていた。逞しいモノに刺し貫かれる牝肉の悦びが、子宮をトロトロに溶かし、背筋を爛れさせる。悩ましい声を溢れさせる唇も緩んで、涎まで垂れている。優しく貞淑な母の顔を剥がされ、すっかり女の本能を剥き出しにされた蜜肉は夥しい樹液を湧かせながら、精をねだるように少年の巨根にすり寄っていく。

「認めちゃいなよ。ハアハア……じゃないと、このまま腔内なかに出しちゃうよ」

「ああつ……そ、それは……だめ……ンあ……な、腔内は……腔内には出さないでえ……それだけはゆるして……っ」

少年に犯される魔悦に溺れかけていた遙が我に返ったように哀訴する。犯されただけなら過ちで済むが、もし妊娠してしまえば、息子との生活すら破壊されてしまいかねない。それだけはなんとしても避けたかった。

「だったら認めるんだよ。遙おばさん。僕のチンポで感じてるって」

遙の上でタケルの腰が躍る。急降下爆撃のような猛烈なピストンが牝蜜の飛沫を飛ばして撃ち込まれてきた。

「うあつ、はあううつ……こんな、深い……んんっ……はあつ……ああんっ！」

お腹の奥の奥に響く悦痺れが魂までも揺さぶる。これほど深くまで貫かれたことは、夫の時でさえなく、遙の官能は未体験領域に突入していく。

タケルのペニスからは牡としての圧力、牝を支配しようという野蛮な欲望がヒシヒシと子宮に伝わってくる。遙を愛し慈しむ夫のセックスとは根本的に異なる征服行為なのだ。

だがその荒々しさがなぜか遙の女の部分を惹きつける。身体がバラバラになりそうな苛烈な快楽責めに、遙は我を忘れてガクガクと頷いてしまう。

「ハッキリ口に出して言うんだよ」

「あ、ああ……か……か、感じる……ううう……感じてるわ……あ、あああつ」

「具体的に言ってくれないと。あまり焦らされると……はあはあ……出ちゃうよ」

「ああ、出しちゃだめ……はあ……わ、私……はあつはあつ……タ、タケル君の……うう……オ……オチンチンで……ンああ……感じてる……あつ、ああ……オチンチン、気持ちがいいの……あふうんっ」

認めてしまった瞬間、背徳の快感が何倍にも膨らんだような気がして、浅ましい昂奮が全身の血を沸騰させる。美貌が火を噴きそうなほど真っ赤に染まり、ぬめるような汗が肌という肌からドツと噴き出した。

「もっと言うんだよ、おばさん。そしたらもっと気持ちよくなれるよ」

遙の耳元に唇を寄せ、卑猥な言葉を吹き込みタケル。

「あ、あううん……私は……む、息子の……同級生の……ああ……男の子のオチン

ポを……無理矢理……オマ○コに、入れられて……あああ……男の子にレイプされて、いやらしい気持ちになつてゐるの……ああ、感じてゐるのおつ……あつ、ああん！」

自らの言葉が呪文となつて、遙自身も知らなかつた秘密の扉を開いていく。

「フフフ、そういう女をマゾの変態ついでうんだよ、遙おばさん」

「あああつ！」

ゾクゾクゾクツ！ これまで使つたこともないふしだらなキーワードが、甘美な麻薬のように遙の脳内へ染み込んで、常識や世間体といったモノを呑み込んでいく。

「ああ……そうなの……おばさんは……あああ……マゾよ……ああん、イイ……おばさんは……変態なのよお……ああ、ああん……もう、狂つちやううつ」

言わされるたびゾクゾクと背筋が震えて、異様な悦楽がこみ上げてくる。絶頂の残り火が再びまっ赤な火を噴いて、熟れた女体を燃え上がらせた。

「狂つていいよ。もつと狂つて僕の奴隷ママになるんだ」

遙の悩乱つぷりを見極め、ここぞとばかり剛直を子宮に撃ち込む。

「ほら、誓うんだよ、おばさん。僕の奴隷ママになるつて」

ドスツ！ ドスツ！ ズブズブズブツ！ ジュブツジュブウツ！

「あひいひい……っ！」

衝撃が背中に突き抜けるほど激しくピストンされ、遙は首輪の喉を反らせて屈曲位

の身体に痙攣を走らせた。理性も常識も矜持も、淫らな被虐の石臼の中に放り込まれ、粉々に搗り潰されていくようだ。

「ヒあつ……ああん……なるわ……タ、タケル君のお……ひい……いい……ど、奴隷……ママに……あおつ……なるわ……ああ……ん」

遙はもうワケがわからなくなつて、求められるままに口走つていた。相手が息子の友人であることも完全に頭から消え、ただひたすらにエクスタシーを求めて腰を振り立て、無毛のワレメをピクピク収縮させた。

「あつ、あああ……あああ……んっ」

切れ長の瞳から完全に光が消え失せ、緩んだ口元から舌まではみ出している。とてもあの気っ風のいい喫茶店のママと同一人物とは思えないほどの乱れっぷりだ。

「くうっ、すごいな」

壮絶なまでの被虐美にタケルも思わず唸る。乱れた黒髪が、たおやかな肩や柔らかい乳房の雪肌に張りついてコントラストを描いている。それはまさに聖母が淫靡に浸蝕されていく姿を彷彿とさせ、少年の獣性を燃え立たせた。

「はああ、僕の奴隷ママになったところで、ご褒美をあげるよつ。このツルツルのオマ○コに、たっぷり中出ししてあげるからねっ」

遙の極上の締めつけと、妖美な姿に刺激され、タケルもいよいよ射精が迫っていた。

勃起はもう限界を訴えて、断末魔の痙攣を繰り返している。

「ンああ……そんなのだめ……ああ……や、約束が……ンあああつ！」

「中出しがイヤなら僕を押しのけたら？ それくらい力は残ってるでしょ」

「~~~~~っ！」

確かに遙が本気で抵抗すれば、タケルの下から逃れられるはずだ。

「あつ、ああ……ああ……こんなの卑怯よ……あつ、ああん……いや……いやなのにいつ……うあああ……どうしてえ……ふあ、あああ、あああん」

どうしても足腰に力が入らない。少年の身体を押し返すことができない。それどころかとろけた膣壁はタケルの勃起に絡みつき、もっと引き込もうとするかのよう。

どんなに抗っても、目前に迫った絶頂に歯止めをかけられはしない。それが女の宿命なのだ。

「ハアハアツ！ 出るよお……おおつ！ ママ、いくよおつ！」

「あああつ！ だめえ……あ、ああ……ママなんて呼んじゃ……だめえつ！」

絶叫しながらも遙の身体が瘡おこりにかかったようにブルブル震え出す。身体の最も深い秘奥から、これまでで最大の波が白い波頭を立てながら押し寄せてくる。

（きちやうつ！ またあ……っ！ シンジ……ごめんなさいいつ！）

息子に詫びつつも遙の両脚がタケルの肩にしがみつき、激しい痙攣が膣肉に駆け抜



ける。快美な電流に感電した淫肉が、螺旋状に肉棒に絡みつき、雑巾絞りのように絞り上げた。密着する粘膜の隙間から愛液がビュクツと溢れ出る。

「締まるよ、ママ……くっ……うううっ！」

まるで貪欲な食虫花のように、陰茎を根元から呑み込まんばかりに食い締められて、さすがのタケルも堪えるのを放棄した。

血も肉も神経も繋がってしまったような一体感がめくるめく快感となって少年の射精中枢を直撃する。睾丸がせり上がるような法悦とともに、熱濁流が肉棒の中心を一気に駆け上がっていく。

ドビュツ！ ドビュツ！ ドビュルルルウウウウツ！

「あひいっつ！」

注ぎ込まれる大量の牡精液が、柔褻の一枚一枚を捲り返らせながら遡り、子宮口を激しく叩いた。一旦堰き止められた白濁は膣内に溜まって圧力を高め、鉄砲水の勢いで胎内へとドクンツと雪崩れ込んだ。

「ンああ、あついいっ、ふあああああつ！ だ、だめえ……っ！」

相姦の疑似体験が快楽のスパイスとなって遙を狂わせる。罪悪感と混ざり合ったどす黒い喜悦が、墮落の焼き印となって遙の脳を焦がし、魂に奴隷の印を焼きつける。

「ひっ、ひいんっ！ イク……ああ、イクツ！ イっちやううっ！」

屈曲位のまま遙は顎を裏返らせ、太腿からふくらはぎ、そしてつま先まで突っ張らせた。仰向けの尻タブをビクッビクッと痙攣させながら、ありったけの力で蜜孔を収縮させ、少年の精を一滴残らず子宮で啜り飲んでいく。

「ああ……スゴイよ、ママっ！ 僕のミルク、はあはあ……もつと飲んでっ」

ぬめつく媚粘膜にしゃぶり尽くされながら、タケルはドプドプッとさらに遙の膣内に精を放つ。

「ンあっ、いやあ……ふあああっ……イクう……あああ……ん」

爛れるような淫獄の炎に包まれ、遙は喘ぎ、啼き、戦慄わななきながら、特濃ザーメンを子宮に受け止め続けるのだった。

第三章 野外露出

「遙さん、なんだかポーっとして……風邪かい？」

客の一人がどこか上の空と言った様子の遙に声をかけた。

「そ、そんなことないわ。私はいつも通り元気よ」

「そうかい。ならいいんだ。ごちそうさま、遙さん」

「いつもありがとうございます」

常連客を見送って、遙は大きく溜息をついた。

（私……なんてことを……）

浴室でタケルに犯されたのが二日前。数年ぶりの中出しアクメを極めさせられ、そのうえ奴隷宣言までさせられてしまった。

舌を噛みたくなるほどの屈辱を思い出せば、自己嫌悪の炎が胸を焦がす。それと同時に、子宮に精を注がれた瞬間の失神するほどの強烈なエクスタシーの記憶も蘇ってきて、遙はブルツと胴震いした。

トゥルルルルルルッ！

そのとき携帯のベルが鳴り、遙はハッと我に返る。

「……水野です」

おそろおそろの通話に出ると――

「こんにちは遙おばさん、元気してた？」

悪い予感の中。やはり相手はタケルだった。

「う……な、なんの用なの」

「今日、創立記念日で学校休みなんだよ。暇でさ」

「そんなこと知ってるわ。用件を言って」

「ちよつとつき合つてよ。おばさんをモデルに水着写真を撮りたいんだ」

「水着写真って……いやよ。どうしてそんなことしなくちゃならないのっ」

「お願いだよ。言うこと聞いてくれたら今日は本番なしでいいからさあ」

「う……本当なの……？」

犯されないで済むというだけで、心が重圧から解放される気がした。罍の危険性もあつたが、人はついつい希望的な展開を期待してしまふものだ。

「約束は守るよ！ じゃあ三十分後に行くから、ちゃんとモデルらしくお化粧して準備しててね。シンジには適当に言つて留守番させてさ」

「ちよ、ちよつと……タケルくんっ」

一方的に告げて電話は切れてしまった。

それから十分後。遙はタケルの言いつけ通り鏡の前で化粧をしていた。

(ああ……また今日も……)

まるで蟻地獄のように、足掻けば足掻くほど深みにはまっていく。

淫行ビデオという脅迫材料よりも、犯されて絶頂させられてしまったという決定的な事実が、重く遙の心を縛っていた。

(あなたゆるして……今は堪えるしかないの)

ファンデーションをはたき、紅いルージュを唇に乗せる。目元にもアイラインを薄く引いてみる。これほど本格的に化粧するのは、いつ以来だろうか。

(これからあの子にいやらしいことされるっていうのに……)

捌られるためにワザワザ身支度を整えている自分が情けなくなつて遙はまた大きな溜息をついた。

「……………」

化粧が終わり、鏡に映った自分をしばし見つめる遙。

いつもよりも化粧のノリが断然いい。肌の艶なめといい肌理きめの細かさといい、普段とはまるで別人のようではないか。

(これが私……)

着ているモノは普段通りのシャツとジーンズなのに、わずかにのぞくシャツブラウスの胸の谷間から、くびれ腰から急角度に張り出したデニムのヒップラインから、ムンムンと女の色香が匂い立つ。

くたびれたおばさんだと思いついていた自分が、まるで女優やモデルのように輝いて見える。それはメイクのせいだけではない。内面から滲み出す女のフェロモンともいうべきものが、濃密な熟れた色気を醸し出しているのだ。

(……あの子のせいだって言うの?)

原因と言えば、思い当たるのは一つしかない。

少年によって胎内深く撃ち込まれた若い牡精。それが粘膜から吸収され、全身に回ってしまったのではないだろうか。

(ああ……いやよ……あんなことは……二度と)

思い出しただけで膣内に吐き出された白濁の熱さを感じてしまい、遙は震えを抑えるように肩を抱いた。

「あれ、お母さん、お化粧してるの？ 珍しいなあ」

「あつ、シンジ」

いつの間にかシンジが背後に立って、鏡をのぞき込んでいる。

「これ……へ、変でしょ。おばさんなのになちよつと派手すぎよね」

「ううん。とつても綺麗だよ。でも……そんなにオシャレして、どうしたの？ お出かけ？ 誰かに会うの？」

普段あまり化粧しない遙に対して違和感を感じているのだろう。素直に綺麗と言いつつも、シンジは根ほり葉ほり聞いてくる。

「その……これは……」

まさかタケルとデートするためと言うこともできず言葉に詰まる。

もし自分の母親が同級生の少年の奴隷ママにされていると知ったら、シンジはどれだけショックを受けるだろうか。多感な年頃だけに、家庭が崩壊してしまうかもしれない。

（絶対に知られてはダメ。なんとか誤魔化さないとっ）

「き……急に昔のお友達と会うことになって……悪いけどシンジ、夕方までお留守番しててくれる？」

「ええ……さみしいよ」

「本当にごめんね、シンジ。お土産買って帰るから」

愛する息子を欺かねばならない罪悪感に胸を切り刻まれる。犯された時は自分を見失って流されてしまったが、冷静さを取り戻した今、やはり息子が誰よりも、なによりも愛おしい。この子を絶対に守らなければならない。

「じゃあ、行ってくるわね。私はあなただけのお母さんよ」

（お願い。一ヶ月ガマンして、シンジ。それまでは……）

自分に言い聞かせるように囁き、遙は愛する息子をきつく抱きしめた。

三十分後。

タケルと合流した遙は、車で町から少し離れた山間の公園に来ていた。

山や川といった自然の地形を利用して作られた公園で、夏休みになると大勢の家族連れで賑わうのだが、梅雨が明けたばかりの今の季節はまだ誰もいない。

周囲も山林に囲まれているので町の喧噪とはまったく無縁。川のせせらぎと鳥の声が聞こえてくるだけだ。泳ぐにはまだ少し肌寒いが、日光浴をしている分には心地よいくらいなので、撮影に支障はないだろう。

「静かでなかなか雰囲気の良い場所ですよ。撮影はここにしようって決めてたんだ。邪魔も入らないし」

カメラを構えたまま、水着姿の遙をつま先から頭の天辺までじっくり観察し、タケルはニヤニヤ嗤う。

「それにしてもどんどん綺麗になっていくね、遙おばさん。その水着もよく似合ってるよ」

少年とは思えない脂ぎった中年オヤジのような表情には、正直虫酸が走る。シンジの同級生というのが未だに信じられない。

「馬鹿言わないで。こ、こんな破廉恥な水着、似合うわけないでしょっ」

遙が着せられた水着は純白のワンピースタイプ。かなりのハイレグで太腿の付け根が白々と暴き出されており、剃られていなければ陰毛がはみ出していただろう。

胸からお腹にかけて菱形にくり抜かれ、形のいいお臍や蠱惑的な下乳ラインが丸見えになっていいる。後ろはお尻が大きく開口したいわゆるOバックで、丸見えと言つていいほど露出度が高い。さらに生地がとても薄いらしく、ツンと尖った乳首やプリプリしたお尻の形が手に取るようにわかってしまう。

ムッチリ脂ののった太腿から、しなやかなふくらはぎへと続く生足の脚線は官能的で、脚フェチでなくともむしゃぶりつきたくなるほど。さらに足元の赤いハイヒールがアクセントとなつて、花を添えている。

「せっかく誉めてあげたのに。冷たいなあ」

「あなたに誉められても全然嬉しくないわ。お店もあるんだから早く済ませて」
弱みを見せまいとつつけんどんに応える遙。恥ずかしさはあつたが、敢えて身体を隠すのはやめた。

「なるほどね、早く撮影されたいってことか」

「馬鹿にしないで。誰がそんな……」

反論しかけて遙は口をつぐんだ。

周囲に誰もいないとはいえ、三十すぎた未亡人が、露出狂のような恥ずかしい水着姿で白昼の公共の場所にいること自体異常である。もしこんな姿を知り合いに見られたら、町中に変な噂が立ってしまうだろう。少しでも早く終わらせるほうが賢明だ。

「わかったわよ……その代わり本当に撮影だけよ」

「フフフ。もちろんだよ。まあ、遙おばさんから欲しいって言われたら話は別だけだね」

「そんなことするわけないでしょっ」

予言めいた不吉な言葉を一蹴し、遙はタケルの前に起立する。

「じゃあポーズをとってもらおうかな。腰に手を当てて、ニッコリ笑って」

カメラマンのように指でフレームを作って指示を出すタケル。

（うう……恥ずかしい……けど……）

遙はなるべくタケルの存在を考えないようにして、浴びせられるギラギラした視線に堪え続ける。恥ずかしいことは恥ずかしいが、これで終わってくれれば、犯されるよりずっとマシだ。

「う……ん。イマイチだなあ。表情も硬いし、ポーズもただ突っ立ってるだけだし」

しかし一旦デジカメを置いて、タケルが不満そうに近づいてくる。

「こんなんじゃない僕は満足しないよ。もっと遙おばさんの女のいやらしさや色っぽいところを撮りたいんだ」

「私にどうしろって言うのよ」

「まず後ろを向いてカメラに向かってお尻を突き出してもらえるかな。おばさんの一番のチャームポイントは、そのムチムチのお尻だと思うんだ」

「お、お尻……ですって」

要求を聞いて遙は絶句する。この穴の開いた水着でそんな格好をすれば、お尻が全部見えてしまうだろう。

「いやなら本番セックスでも構わないんだけど。どうするの？」

絶対的な決定権を持つていながら、最後の決定は遙本人にさせる。自らの言葉は潜在的な拘束力となつて遙を脱出困難な迷宮へと追い込んでいく。

「わかったわよ」

(どうせ逆らえないんだから……早く終わらせたほうがマシだわ……)

遙は洪々と命令されたポーズをとる。腰を前に屈めてお尻を突き出す、馬跳びの馬のような格好だ。

「ほら、もっと前に身体を倒して。モデルなんだからさ」

「きゃうんっ」

ピシャンッとお尻を叩かれて屈辱の悲鳴が漏れる。ずっと年下の少年にお尻をぶたれる屈辱は、肉体的な痛みよりも遥かに大きく心を抉った。

「本番はしない代わりになんでも言うこときく約束だよね」

「うう……するから、お尻をぶつのはやめてっ」

観念し遙は両手を膝についてさらに前屈させる。当然Oバックの開口部がさらに広がり、ムチムチした尻肉がこれ見よがしに差し出される。ハイヒールを履かされているせいか、谷間も左右に広がって、恥ずかしい蕾が今にも見えてしまいそうだ。

（ああ……男の子の前で……こんな格好するなんて……）

真つ昼間の川辺で、セクシーな水着姿をタケルに観賞されるのは、予想以上の恥ずかしさだった。

腋や太腿を風に撫でられ、白いお尻を日差しに焙られて、いやでも自分の常識はずれの露出度を自覚させられる。

普段スカートすらあまり穿かない遙にとって、全裸でヌードモデルをさせられているのとかかわらない恥辱だった。

「これでいいでしょ……ハア、ハア……と、撮るなら、早く撮りなさい」

「まだまだ全然色気が足りないよ。両手でお尻を広げてくれるかな」

「な……いい加減にして。そ、そんな恥ずかしいことできるわけないでしょっ」

破廉恥すぎる命令に、さすがの遙も頭に血が上る。切れ長の瞳も凜とした光を放つて、少年を睨みつけた。

「まだ大人のプライドが残ってるんだね。でもグズグズしていると……」

「えっ……ああっ！」

タケルが指さす方向を見ると、タケルと同じ年くらいと思われる少年二人が、対岸からこちらをジッと見つめているではないか。偶然居合わせたのだろう、驚きの表情で口をあんぐりと開けている。

「あ、ああ……そんな……」

幸い子供たちだけで大人の姿は見えないが、それで羞恥が和らぐことはない。見られてしまったという衝撃が大きすぎて、遙は口をパクパクさせたまま完全に思考停止してしまう。

「おばさんが早くしないから悪いんだよ」

呆然とする遙の隙を衝いて、いやらしい手つきでOバックのお尻をガツシリと抱く。「ちよつと……いやっ……や、やめなさい……あの子たちが見てるのに……っ……ひやうっ！」

いきなり冷たい感触にアヌスの中心を貫かれて、黄色い悲鳴が迸る。何か細くて硬

いモノがお尻の穴に挿入され、そこから冷たい液体が送り込まれてくるのだ。

「つ、冷た……ああ、な、なにをしているのっ!!」

慌てて振り向くと、残忍な笑みを浮かべるタケルと目があった。その手にはイチジク型の浣腸が握られているではないか。

「浣腸だよ。遙おばさんがもつと素直になれる魔法のお薬さ」

「そんな……やめてっ! 変なことしないで……あ、うああ、ああああっ!」

抗議する間もなく容器が握りつぶされ、薬液が注入されてくる。あまりの冷たさに尻タブがサツと鳥肌立ち、エクボを刻んで強張った。

「もう遅いよ。全部入っちゃったよ」

「そんな……ううう……くっ……あうっ」

冷たかった薬液の存在感が、次第に体温に馴染んでわからなくなる。だがそれと比例するように、早くも便意がジワジワと膨らんできた。

「フフフ。もう効いてきたようだね」

「うう……お、お腹が……ハアハア……ああ……こんなのひどいわ……うううん」

グリセリン液の猛威にお腹を攪拌され、遙は白い菌をギリギリと噛み縛る。浣腸がこれほど苦しいとは思っても寄らず、苦悶に歪む美貌に脂汗が噴き出してきた。

(まずいわ……見られているのに……このままじゃ……)

対岸の少年たちはこちらの様子をうかがうようにジッと見つめている。あの子たちの前で恥を晒すことは死んでも許されない。

「今にもお漏らししちゃうそうだね。あいつらもビックリするだろうなあ」

「うう……いい、いやよ……ハアハア……あの子たちの前で……も、漏らしたりするもんですか……ああううん」

全身の筋力を総動員して括約筋を締めつけ、遙はタケルを睨んだ。見られたくないと言う気持ち以上に、こんな卑怯なやり方に屈するのは彼女のプライドが許さない。

「そうだね、遙おばさんは立派な常識ある大人だもん。人前でお漏らしなんて、絶対、死んでもするわけないよねえ」

「う、うああん」

遙のお腹を撫で回し、陰険に微笑むタケル。もう遙が逃れられないことをわかっていくくせに、わざとプレッシャーをかけているのだ。

「うう……お腹、触らないで……ああ……だめ……お、おトイレに……」

「撮影が終わったら行かせてあげるよ。さあ、さっきのポーズをとって」

「あ、ああ……うううっ」

問答無用で再びお尻を突き出す破廉恥ポーズをとらされる。浣腸をされているぶん、いやでも意識がアヌスに集中し、タケルの視線をいつそう強く感じるようになった。

「さあ、お尻を広げてよ」

「う、ううっ……恥ずかしい……」

こうなってしまう以上、一刻も早く終わらせるしか手はない。余裕を失った遙はオズオズと両手をお尻に回すと、尻タブをつかんでゆつくりと左右にくつろげた。0バック開口部から尻肉がはみ出すように突き出され、小さく窄まったアヌスが完全に露わになった。

淡いセピアの色素沈着具合から放射状の皺の一本一本まで、すべてがタケルの目に晒されてしまう。お尻は対岸のほうに向けているので、ひよつとしたらあの少年たちにも見えているかもしれない。

「はあ……はあ……あああ……こんなの……惨めすぎるわ……」

決して人目に晒してはならない箇所を白昼の公園で暴き出され、激烈な羞恥に頭の血管が切れてしまいそう。息子がいなければ、舌を噛み切っていただろう。

「フフフ。おばさんのお尻の穴……可愛いよ」

「ンああっ！ いや、触らないで……っ！」

「あんまり大声出すと、あいつらが変に思うかもよ」

「う、うう……」

アヌスのすぐそばまでまさぐられて、恥ずかしさにキュツと肛門が窄まる。ポリユ

ムたつぷりの白桃に挟まれたアヌスは、岩陰にひっそり咲く野菊のようで可憐さが
いっそう引き立つ。

「僕に触られてお尻の穴が嬉しそうにヒクヒクしてる。おばさんみたいに気が強い女
はお尻が弱点だって言うけど、やっぱり感度がいいみたいだね」

皺が放射状になっていているセピア色の外縁を、取り囲むようにじっくり指が這う。

「あ、ああ……感じるわけない……あんっ……だめよ……そこは……きたないから……
……やめて……ああ……む」

「おばさんの身体にきたないところなんてあるもんか。旦那さんは触ってくれなかつ
たの？」

「あ、当たり前ですっ……あの人は……ううう……あなたと違って……はあはあ……
変態みたいなこと……しないわっ……うふう……んんっ……もうやめて」

排泄器官を性の対象にするなど、遙にとつて受け入れがたい変態行為である。そんな
おぞましい性戯に、この年下の少年が興味を持っているということが信じられな
かった。

「こないだお尻を放置だなんて、もったいないなあ。ま、そのお陰でアナル処女を
楽しめるんだけどね」

まったく意に介さず、タケルは触れるか触れないかのフェザータッチで恥肛周辺に

愛撫を続ける。

「フフフ。こんなにヒクヒクさせて……見られてるよ」

「あうっ……ふっ……くっ……んっ……いや……触らないで……見ないで……あむっ」

浣腸されているせいか、タケル以外の少年たちに見られているという異常なシチュエーションのせいか。触られるたび、ゾクゾクと痺れるような快美が背筋を這い上がり、肛門が恥ずかしいほど大袈裟にヒクついてしまう。妖しい痺れはやがて子宮に伝わり、お腹の奥がジリジリと熱を帯びてくる。

（な……なんなのこの感じは……？）

ノーマルなセックスしか知らない遙にとつて、排泄器官に性感帯があるなど信じられない事態だった。しかし身体の奥底に届くふしだらな疼きは、確実にアヌスから伝わってくるのだ。

「ハア、ハア……悔しい……うう」

いつしか呼吸が荒くなり、全身の肌からジットリと汗が噴き出していた。

初夏の日差しを浴びているとは言え、それだけでは説明のつかない熱さが身体の芯に感じられる。

「僕みたいな子供にお尻の穴を弄られて、それを見られて感じてるんでしょ。いつも

よりドキドキするでしょ？」

答えを急かすように、少年の指がアヌスの中心にあてがわれた。

「感じてなんか……ああ……今は、お尻は触らないでっ」

漏れそうになり遙は慌てて腰を振り、括約筋を締めつけるのだが、タケルの中指は蛭のように肛門粘膜に吸いついて離れない。逆に侵攻の圧力を強め、括約筋の抵抗を責め砕く。

「ひいんっ！ だめっ……今触られたらあ……ああ……も、漏れちゃう……ンあはあ……ああん」

必死の締めつけも役に立たず、第二関節まで埋め込まれてしまった。指一本だというのに、便意は何十倍にも増幅され、遙を内側から責めさいなむ。

「すごい締めつけだね。ここにチンポを入れたら気持ちいいだろうなあ」

「あうっ……そんなのだめよっ！ お尻でなんて……へ、変態のすることだわ……ああああ……やめて……動かさないでえ……あああんっ！」

生まれて初めての肛門調教に、尻肌がゾゾゾッと鳥肌立った。一体どこまで捌れば気が済むのか。お尻まで狙う少年の異常な欲求さに、恐怖すら感じてしまう。

「いいよお。お尻の穴がどんどん締めつけて、とつてもエッチだよ。僕はおばさんのこういう顔を撮りたかったんだ」

指を包み込む粘膜はとろけるように熱く柔らかい。それでいて括約筋の締めつけも強力で、いやでもアナルセックスへの期待を煽ってくる。

「今のうちにバージンアナルを撮っておこう」

パシャッ！ パシャッ！ パシャッ！

「いやっ、いやっ、いやあっ！」

肛瘻に喘ぐアヌスにフラッシュを立て続けに浴びせられ、遙は気も狂わんばかりに悶絶する。このまま恥ずかしさで死んでしまいそうだった。

「うああんっ……そこは見えないで……ああ……撮ってはダメよ……ああ……んっ……あ、ああん……指を抜いてえ……ああああっ」

腸内で暴圧が大きくなり、鳴動音もゴロゴロと不気味に鳴り始める。眉を折り曲げた美貌が苦悶に歪み、切羽詰まった喘ぎ声が濡れた朱唇から溢れ出す。

「ウンウン。いいよ、その表情。いやらしくてスケベな牝の顔だ」

パシャッ！ パシャッ！ パシャッ！

続けざまにシャッターが切られ、まっ赤に染まった美貌にもストロボが白い閃光を浴びせかける。その間も指はリズムカルに肛径をほじくり返し、休む余裕を与えない（あうう……あの子たちにも見られてるのに……お尻が……あああ……）

ある意味排泄器官は女性器以上に見られたくない羞恥の源泉である。そこに突き刺

さる無垢な子供たちの視線と焼けつくようなフラッシュが、遙の羞恥を燃え上がらせ、理性を磨り潰していく。

「あれあれ。感じてないって言うてるくせに、水着に変な染みができてるよ。乳首も立ってきたし。さあ、もっとお尻を振って、見せつけてやろうよ」

「ああ……」

オズオズとお尻をくねらせる遙。陽光を反射する双臀はそれ自体発光しているように眩しく少年たちの視線を釘づけにする。

さらに水着のクロッチ部分には熱い蜜が染み出し、重そうに垂れ下がった乳房の頂点で、ニップルは痛いほどしょこっている。

（死ぬほど恥ずかしいのに……どうして……）

野外露出の羞恥とアヌス黴りの快美と浣腸の苦しさとが混ざり合い、ドロドロの溶岩のように遙の胎内で渦を巻く。その熱渦は神経を灼き焦がしながら全身へ広がり、脊髓を伝わって脳幹にまで延焼する。

「あ、ああ……うう……ハアハア……もう、ゆるして……ふううんっ」

目の前に紅い帳とばりが降りてきて、遙は不可思議な浮遊感に包まれた。我を忘れたまま腰が激しくうねり出し、タケルの指にあわせて円舞を描く。

「こんな状況でも濡れるなんて、やっぱりマゾ奴隷の素質があるよ」

徐々に崩れていく未亡人を見つめながら、にんまりとほくそ笑む。

悩ましく黒髪を揺する美貌は、夥しい汗にまみれ、湯上がりのように赤く上気している。そこから溢れるセクシーな息遣いは、便意の苦しさだけではないだろう。調教の成果は確実に現れ、遙は気丈な母親から淫蕩な牝へと変身しつつあった。

「ほら、認めちゃいなよ、自分がマゾだって」

中指をズブリと根元まで埋め込み、荒れ狂う濁流をさらに加速させる。そうかと思えばジリジリと引き抜いて失禁を煽る。

「あ、あああ……そんなにしちゃだめえ……も、漏れちゃう……あふうん……み、認めるから……ああ……おトイレに……おトイレに行かせてえ」

切羽詰まった悲鳴を上げながら、差し迫った破局を避けようと遙はその場でハイヒールの踵を鳴らし、地団駄を踏む。逃げ出そうにも、今はタケルの指で栓をさされている状態であり、指が抜けた瞬間に漏らしてしまうだろう。

「言ってよ。年下の男の子の前で恥ずかしい格好して、気持ちよくなってるってね。そうしたらトイレにいかせてあげる」

今にも抜け出る寸前まで指を後退させ、タケルが迫った。

「あ、ああ……遙は……ハアハア……男の子の前で……ああ……恥ずかしい格好して……お、お尻の穴……まで見られて……ああ……はああむ……か、感じてるのっ

……ああ、ああん」

言わされるたび、得体の知れない昂奮が遙を内側から突き上げ、頭の中に白い霞がかかってくる。目映い閃光の中、これまで大切に思ってきた何か次々と剥がれ落ちていく気がした。

「フフフ。それじゃあもつと気持ちよくしてあげるよ」

処刑人のような残酷な笑みを浮かべたあと、タケルは指を引っこ抜いた。

「ひいっ！ いやあああああああつ！」

のどかな公園の空気を引き裂く絶望の悲鳴。その直後汚辱の濁流が一気に迸る！
腰を突き出したポーズでの排泄は後方の川に向けての派手な放出だった。

「アハハハッ！ 全部撮ってあげるからね、おばさん」

パシヤツパシヤツパシヤツ！

さらに無情にもシャッターが連続で切られ、ストロボの明滅が網膜を灼く。

「あ、あああつ！ 見ないで……見てはいやああつ！ と、撮らないでえ！ ンあああゝゝゝゝつ！ 止めて……ああ、止めてえつ！」

決壊した激流を止められるはずもなく、ガクガクと膝を震わせながら羞恥の放物線を描き続ける。恥辱に歪む美貌にはしかし、どこか恍惚とした陶酔が浮かんでいた。

「はあつ……はあつ……あああ……」

やがてすべてを搾りきり、遙はその場に崩れ落ち、意識を失ってしまった。

「おぼさんのすごいところ見ちゃった」

「び、びっくりしちゃったよ。ウヒヒ」

「あ、ああ……っ！」

遙はハッと我に返って身を起こす。いつの間にか川を渡って来た少年たちが遙たちを取り囲み、好奇の視線を注いでいるではないか。

「いや……み、見ないで……見てはダメえ」

逃げ出したいところだが、腰が萎えてしまつて力が入らない。どうしていいのかわからず、迷子の子猫のようにブルブルと震えるばかり。

「全部見られちゃったね。ママ」

「うう……タケル……くん……」

「紹介するよ。こいつらはクラスメイトのリユウジとゲン」

リユウジは背が低く出っ歯で吊り目のネズミのような少年で、ゲンはでっぷりと肥えた肥満児だった。

「こんにちは。タケル君のおぼさん」

「こ、こんな美人のママがいたなんて知らなかったよ」

幸か不幸か、リュウジもゲンも遙のことをタケルの母親だと思い込んでいるらしい。息子を誰よりも愛する遙には屈辱だが、素性を隠すためにも話を合わせるしかない。

「こいつら口が軽いから街中で噂になっちゃうかもね」

「そんな、それだけはやめて。ハアハア、お願い。内緒にしてくれるなら、なんでも言うこと聞くから……」

遙は真つ青になつて懇願する。こんなことが表沙汰になれば、自分だけでなく息子にまで被害が及ぶだろう。それだけは絶対に避けなければならない。

「ご覧の通り僕のママは露出狂の変態っていう病気で、時々こうやって欲求不満を解消しないとイケないんだ。黙っててくれたら、お礼にママがいいことしてくれるってさ」

「タケル君のママのお願いならきいてあげてもいいよ」

「い、いいことつて、具体的にはどうするのさ？」

「そ、それは……」

いやらしい視線で見下され戸惑う遙。

状況からすれば三人の目的は遙の身体だろう。彼らがタケルとグルだという可能性もあるが、それを確かめる手段もない。

（こんな惨めな姿まで見られたんじゃない。今さら恥ずかしくなくても仕方ないわ）

半ば自棄気味に覚悟を決める。

「ああ……お願い……あなたたちの……オ、オチンチン……オチンチンを……はああん……おばさんに……おしゃぶりさせて……」

跪いて破廉恥な懇願をする遙を見て、三人の少年たちは顔を見合わせてほくそ笑んだ。

「んっ……んちゅ……くちゅ……はあはあ……ど、どうかしら……おばさんのおっぱい……気持ちいい？ あむっ……くちゅばあっ」

爽やかな初夏の川辺に遙のなまめかしい息遣いが響き、空気がそこだけ淫靡に染まっ
つていく。

「ああ……気持ちいいよお……おちんちん……おばさんのおっぱいに食べられちゃい
そうだ」

膝立ちになった遙は、目の前に突き出されたリュウジのペニスに舌を這わせていた。ただ舐めるだけでなく、豊満な乳房を使つて陰茎を挟み込みわゆるパイズリだ。仮性包茎で陰毛もなく、ペニスも年相応のサイズで、それがかえつて背徳感を煽つてくる。

（ああ……私……何てことを……）

白昼の公園で少年相手の破廉恥行為——遙は己の罪深さに戦慄を感じる。

これまでは騙されたり強要されて仕方がない状況だったが、今は遙のほうから誘つてのことだ。淫行以外の何物でもなく、背徳感や罪悪感は計り知れないほど大きい。「ククク。最高にエロいよ、ママ。ゲン、もつと撮れよ。写真はあとでお前たちにもやるから」

「オーケー。フヒヒ、いっぱい撮つてあげるよ」

パシヤッ！　パシヤッ！　パシヤッ！　パシヤッ！

ふしだらな未亡人の姿をカメラに収めながらゲンが嗤う。

母性を感じさせるGカップは驚くほど柔軟に形を変え、ミルクを溶かし込んだような乳肌がペニスを呑み込んで波打っている。

さらに汗のせいで水着が透明度を増し、ツルツルに剃られたワレメをクツキリ浮かび上がらせていた。

「ハア……ハア……もう……撮らないで……んちゅ……写真は堪忍して……くちゅん」

リュウジのペニスに唇を犯され、タケルにアヌスを責められ、それをゲンに撮影されて……羞恥地獄のどん底に突き落とされ、気の強い遙も弱々しい声で懇願してしま

「なに言ってるんだよ、ママ。もつと撮って欲しいクセに」

「あ、ああ……と、撮って……んふうん……もつと……私を見て……ああ」

「さぼっちゃダメだよ、おばさん」

「んぐぐつ！ ご、ごめんさい」

タケルにお尻をぶたれ、リュウジに黒髪ポニーテールを引かれ、初々しい肉棒に舌を這わせる。

これまでの人生で最大の恥を晒し、大人としてのプライドもへし折られ、身も心も消耗しきった遙はもはや無抵抗の生贄だった。魂が抜けた人形のように、少年たちの性玩具にされていく。

「そ、それにしても欲求不満なら、タケル君のパパに頼めばいいのに」

「それがママは重度のショタコンで、大人より僕たちみたいな男の子のオチンチンが大好きなんだよ。だからたまに僕が不満を解消してあげるんだ。そうだよね、ママ」
答えを促すように太い親指が弱点の肛門にズブリとねじ込まれる。強制排泄で緩んでしまったアヌスはあっさりと迎え入れてしまう。

「うあ……ああ……お尻はだめ……もういじめないで……」

排泄器官を嬲られると先程の排泄が思い出され、敗北感が深く心に根を張っていく。しかも浣腸直後で肛門粘膜は敏感になっており、そこからビリビリと子宮にまで響く

淫震に目眩まで感じてしまう。

「お尻でも感じてくるクセに。ほら、こっちはグチョ濡れじゃないか」

さらに中指と人差し指が膣孔に差し込まれる。まだ一度も触れられてなかったはずなのに、そこはもうトロトロに蜜を溢れさせていた。

「本当だ。ぼ、僕らみたいな男の子のチンポしゃぶってオマ○コ濡らすなんて、おばさんは変態なんだねえ。ウヒヒ」

ゲンが蜜部にフラッシュを浴びせ、恥ずかしい反応のすべてを記録に残していく。

(ああ……そんな……わたし……)

少年たちの指やペニスや視線を意識すると、言葉では説明のできないざわめきが心と身体を震わせ、遙を被虐の底なし沼へ追いつめていく。

「ああ……そ、そうなの……私は……ちゅば……お、男の子のオチンチンが大好きな変態なの……だ、だから……息子に頼んで欲求不満を解消してるの……ああ、ふうん」
自らの言葉が背徳の愉悦を呼び起こし、背筋を千の羽毛でくすぐられるようなゾクゾク感が這い回る。異常な衝動に駆られた遙は、取り憑かれたように少年の陰茎に舌を絡ませ始めた。

「へえ、じゃあこれからは僕たちも手伝ってやるよ。タケルのおばさん」

リュウジもそれにあわせて仮性包莖ペニスを胸の谷間でスライドさせる。



● REC

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!